

第二十三回 原子力市民委員会

放射能安全神話の流布と帰還政策のひずみ

～被害およびリスクの過小評価、「安心」の強制、「復興」が切り捨てるもの～

原子力市民委員会(CCNE)は、『原発ゼロ社会への道 2017』等で、現在の政府が進める「帰還促進政策」には、住民の意思が反映されていない上、被ばくリスクが過小評価されていることに強い懸念を表明してきました。

一方、安全安心の宣伝材料として、復興庁パンフレット『放射線のホント』や文科省の『放射線副読本』などが組織的に配布され、「あらたな安全神話」(放射能はそれほど恐がらなくてよい、被災地の放射線量はそれほど心配ない、不安を抱くほうがストレスになってよくない、云々)が正当化されようとしています。しかし、その記述内容には、科学的にも倫理的にも数々の疑問があります。

昨今、ガラスバッジによる伊達市の住民被ばく線量評価をめぐる宮崎真・早野龍五論文が厳しい批判を浴びている問題にも見られるように、信頼できない科学を根拠にした政策決定は、「人間の復興」を遠ざけるものでしかありません。帰還促進、被害者の分断と切り捨てを政府が強引に進める現状において、いわゆるリスクミヤや安全安心の言説が被害者と地域社会にどのような影響をもたらしてきたのか、見極めることが重要です。

今回の委員会では、「あらたな安全神話」をどのように解体し、本当の「復興」のために何が必要なのか考えたいと思います。委員会はどなたでも傍聴いただけますので、ぜひ多くの皆様にご参集いただくと幸いです。

■ 日時：2019年 **3**月**8**日(金) 15:00～18:00

■ 会場：文京シビックセンター スカイホール

(東京都文京区春日1-16-21 文京シビックセンター26階)

■ プログラム(予定)：

第一部：発表と討議(15:00～17:30)

1. 原発事故後を生きる人々 —— 事故当時の状況についての新たな証言も踏まえつつ

／ 吉田千亜(フリーライター、主著に『ルポ 母子避難 — 消されゆく原発事故被害者』岩波新書 2016年、『その後の福島 — 原発事故後を生きる人々』人文書院 2018年など)

2. 福島第一原発事故による被害とリスクコミュニケーション —— 被災地からの視点

／ 八巻俊憲(元福島県立田村高校理科教員、原子力市民委員会福島原発事故部会メンバー)

3. 文科省『放射線副読本』2018年改訂版の批判的検討 —— 削除、復活、追加された内容

／ 後藤 忍(福島大学共生システム理工学類准教授、原子力市民委員会福島原発事故部会メンバー)

4. コメント：島藺進、清水奈名子、市村高志ほか

5. 質疑および全体討議

第二部(17:30～18:00)

6. CCNE各部会・プロジェクトチームの進捗報告、今後の取り組み予定など

■ 申込み：当日でもご参加いただけますが、資料準備の都合上、3月6日(水)

までに下記のEmailかFaxにて、お申込みいただけますと幸いです。

■ 主催：原子力市民委員会



お問合せ：原子力市民委員会事務局

〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町4-15 新井ビル3階(高木仁三郎市民科学基金内)

Tel & Fax 03-3358-7064 E-mail: email@ccnejapan.com <http://www.ccnejapan.com>